

二次元ぷち文庫

# 大熊狸喜

表紙イラスト：あめじん



**試し読み版**

しきりょうのきこい  
**敵舞の奇祭**

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『故郷の奇祭』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

こまゆのまじい  
故郷の奇祭

大熊狸喜  
表紙 / あめじん

## 登場人物紹介

### Characters

---

けんざき まこと  
**拳咲真琴**

有名な空手家だった亡き父を尊敬する空手一筋の少女。正義感が強く、明るい性格で男女問わず人気がある。

けんざき さなえ  
**拳咲早苗**

真琴の母。清楚で慈愛に満ちた女性。美しい美貌と熟れた身体の持ち主で、村の男からの視線を集めている。

はんま まりな  
**半間麻利奈**

真琴のクラスメイトで明るくて人懐っこい少女。

だま  
**唾間ヤスヒロ**

真琴のクラスメイトで同じ道場に通う門下生の少年。

しちげん みよし  
**七件診由**

祭の全てを仕切っている村長。

山々に囲まれた深い谷底のような、小さな農村、奥座谷村<sup>おくざや</sup>。そこは一日にバスが一本しか往復しないという、また一本橋だけで道路が繋がった、忘れられたような山村だった。夏を前にしてもなお気候は涼しく、山から吹き下ろす風も穏やかで優しい。

個人では自動車どころか自転車すらも必要としない小さな山間の村に、珍しくバスではない車が二台やって来た。一台は中型トラックで、一台はタクシード。

先頭のタクシーが一軒家の前に停車すると、助手席のドアが元氣よく開かれる。

「お母さん、着いたよっ！　ここがお父さんの故郷なんだよねっ！」

続く、引越しのトラックが停車する。同時にタクシーからピョンと飛び降りたのは、お尻に届くほどの長いポニーテールが風に揺れる、一人の少女、拳咲真琴<sup>けんざきまこと</sup>。

サラサラの黒髪は美しい艶で天使の輪を描き、大きなツリ目はキラキラと輝いている。ツンと通った鼻筋と小さな唇が、丸い小顔に綺麗なバランスで収まっていた。

かなり大きめな白いTシャツにデニムのジャケット、赤いミニスカートに包まれた肢体は、高等科一年生にしては見事な起伏を魅せている。

小顔を乗せた首は初等科女子のように細く、しかし丸い乳房は頭よりも大きく実り、サイズオーバーなシャツが伸びるほど、内側からドンつと大きく突き上げていた。

反して、ウエストはシャツが余る程しなやかに括<sup>く</sup>かれていて、更にミニスカートに包まれたヒップはタツプリと発達。

張りのあるお尻頬で、スカートの後ろがギリギリまで持ち上げられていた。

パツンパツンの腿はほど良く皮下脂肪を乗せていて、膝を通って足首に向かう、緩やかに色っぽい脚線美。

濃紺色の靴下を履く足首もキュッと絞られていて、小さな白いシューズが少女の清潔感をより愛らしく引き立てていた。

全身のバランスは完璧にグラマー系だけど、実は空手少女の真琴。鍛えられた身体は引き締まっていて格好良い。

好奇心一杯の瞳をクリクリさせて周囲の景色を堪能すると、元気に振り返って、車中の母を呼ぶ。

「わああ〜……お母さん見て見てっ。お父さんの故郷、すっごく大自然だよっ！」

タクシーの料金を精算した後、引越し業者の運転手さんたちに荷物の搬入をお願いしていた黒髪の女性は、娘の言葉に深い想いで応えた。

「ああ、そうね……ここが、あの人の生まれた故郷なのね……」

澄み渡る青い空と新緑の鮮やかな山を見上げて、真琴の母、早苗さなえは一年前に他界した夫を想う。

「あなた……いま私たちは、あなたの故郷にいます」

実は早苗は、この村を訪れるのは二度目だし、真琴に至っては初めて。結婚前、夫の両

7

親に挨拶に来た時の、一度きりだった。

「故郷について……あなたはあまり、話して下さらなかつたわね……」

豊かでしなやかなセミロングの黒髪は、濡れたような艶を魅せながら、山からの優しい風を受けてフワリと揺れる。

三十代半ばの、ムンつと成熟した色香を纏う佇まい。愛らしい垂れ目と細くて綺麗な小鼻、ポツテリとした唇などは、黙っていても男性の欲求を誘ってしまふ程、セクシーだ。

母娘の血だろう。細い首に対してバストは大きく、真琴が巨乳と称するならば、母の早苗は爆乳。

ピンクのワンピースとシックな上着に包まれた大きな乳房は、娘同様、重みと柔らかさを魅せ付けながらも、重力に負けじと、ツンと上を向いている。

ウエストの括れは緩やかで、女尻は左右と後ろに向かつて大きくタツプリと拡がっている。膝丈のスカートに隠されているが、僅かに覗ける腿はムッチリと脂が乗っている。

細い膝から絞られた首筋にかけての脚線美は、セクシーを通り越して扇情的だ。

母娘ともに白い肌は透き通る様にスベスベで美しく、女として恵まれたプロポーションは、誰が見たって二人が親子である事は明白。

引越し業者が荷物の搬入を始めると、母娘は左隣の家へと挨拶に向かう。呼び鈴がないので、玄関を開けて挨拶をすると、優しい面立ちの老夫婦が迎えてくれた。

「お義父様、お義母様、ご無沙汰しております」

「お爺ちゃんお婆ちゃんっ、こんにちはっ！ お久しぶりっ！」

深々と頭を下げる母と違って、真琴は嬉しさ一杯で、父方の祖父母に抱き付く。

「おうおう、相変わらず元気だねえ、真琴。あっはっは」

孫娘の来訪を、二人はシワだらけの顔を更にクシヤクシヤにして歓迎してくれた。

屈託のない娘を困った笑顔で見つめながら、母は両親への礼儀を忘れない。

「このたびは色々とお気遣いを頂いてしまい、何とお礼を申し上げれば……」

母娘に一軒家を提供してくれたのは、誰でもない、夫のご両親。

「何を言うの、早苗さん。あなたこそ、孝が亡くなつたあと……一人で頑張つて、真琴を

こんな立派に育ててくれて……」

真琴の父であり早苗の夫だった拳咲孝は、高名な空手家だった。国内の大会では負けなしの実力派で、世界でも十指、日本でも五本の指に入るほどの達人。

しかし一年前、海外の大会を優勝という栄光で凱旋した父は、帰宅の途中で、見ず知らずの少女を護つて交通事故に遭い、帰らぬ人となった。

子供の頃から父を尊敬している真琴は、物心つく頃には父と同じく空手の道に進み、高等科になった現在まで、国内では負け知らず。

そんな、母に似た美しい容姿と父譲りの実力を兼ね備えた真琴。

愛らしい笑顔と明るい性格もあって、今や全国の空手男子たちの憧れの的であり、尊敬と親愛を込めて「空手姫」とも「黒帯プリンセス」とも呼ばれていた。

「とにかく早苗さん、本当によく来てくれたわ」

夫が亡くなって一年、お総菜屋さんで働きながら頑張つて真琴を育ててきた早苗。その勤め先が閉店したのは、一ヶ月ほど前だった。

新しい勤め先がなかなか見付からず、以前から一緒に暮らそうと孝の両親が声を掛けていてくれた事もあり、母娘は村に越してきたのだ。

この村で、真琴は学校に通い、早苗は夫の実家である農場を手伝う事になっている。「お爺ちゃん、アタシ、昔お父さんが通っていた道場にも通うよっ！ お父さんの故郷で空手を磨いて、もつともつと強くなるんだっ！」

明るく笑つてガッツポーズをとる孫娘に、祖母は涙を滲ませていた。

山間の小さな村だからか、人同士の繋がりが密であると、初めて知った早苗と真琴。

引越しの時には、村の人々が集まってきた。若い男性たちは家具の運びや配置を進んで手伝ってくれて、女性たちは掃除や昼食作りを手伝ってくれる。

「奥さん、このタンスはこっちでいいですか？」

「美味しい大根があるから、ゴツ煮にしちゃいましょ」

村の人たちはみんな明るくて屈託がなく、引越し作業が終わる頃には、早苗たちをす

天井開脚という、少女にとっては死よりも恥ずかしい姿勢にされる麻利奈。そんな少女を真つ先にレイプし始めたのは、なんとクラスの担任教師。

「かははあつ、麻利奈くん、ふへへへつ」

いつもは知的で優しい男性教師は、少女レイプの欲情以外に何も無い、ただ狂った姦獣と化していた。

「ボクはねえ、へへへつ、いつもいつもキミのイヤらしい肉体をつ、こうして楽しみたいと思っっているんだよおおつ！ 胸もこんなに大きいしねえ、グツへへへ！」

「つ……そんな……先生……つ！」

担任教師の、あまりにも耐えられない姿。思わず退いてしまった空手少女の腕が、別の男に掴まれた。

「あうつ——このつ！」

強烈なヒジ鉄を喰らわせたものの、倒れる男の手で掴まれた袖が、ビリリつと引き千切られる。

そんな間にも浴衣を剥かれた友達が、真琴に絶叫をした。

「真琴つちいいつ、逃げてええええええつ——ついやあああああああああつ！」  
裸で開脚尻にされた少女が、狂った担任の勃起で、真上から乱暴に肉串刺しにされる。

——つづちゆりゆつつ！

「つああつ、やだあああつ——つ先生つやめてええええつ！」

「先生なあ、一年間もガマンしたんだよおおつ。その分タツプリとレイプさせて貰うからなああつ！　ンッフッフッフ！」

邪に笑った男性教師は、生徒に対して淫虐の抽送を始めた。

——つヅゆぬるチゆつ、づプちユぶぢゆつヂゆつ、づチゆつぶヅぶづぷつ！

「んははあああつ、麻利奈くうんつ、若い締めつけが溜まらないねええつ！」

「いやあああああつ——はつあああああつ——つ先生ゆるしてええええつ！」

耳を塞ぎたくなるような言葉と、教師による強制猥褻。真琴は目の前の光景に、もはや言葉も出なかった。

「ま、麻利奈……っ！」

空手少女は、もう走るしかない。

とにかく村から逃げ出して、近くの街まで逃げ切つて、誰かに助けを求める。それしかないのだ。

「待っててつ、麻利奈、お母さん……っ！」

男たちを打ち倒しながら、真琴は星が見え始めた林の中を掛けていった——。

自ら受け持つ女生徒を犯す教師と、犯される少女の両掌両脚を押さえる男たち。

麻利奈も必死に藻掻くものの、一度レイプされたショックのせいかな、女体からは抵抗の気力までもが奪われてゆく。

「あああああつ——あつあつはあんつはあんつ——つせんつ、せええええええつ！」  
肉体を犯されながら、少女の絶叫が艶へと変容してゆく。

忘れさせられて、そして再びレイプされるショックに、心が碎かれてしまっていた。  
女体を犯す勃起の存在に、踏みにじられた心と身体が、女の反応を示してゆく。

熱い蜜を溢れさせる粘膜は暴虐の肉棒をキツく抱き締め、自身が決して望まない愛撫と奉仕を捧げてしまう。

「いいよう麻利奈くうんつ、んぐぐつ——もつともつと先生を、楽しませてくれよおつ、んつははははあつ！」

「ようし、先生がマンコなら、オイラは麻利奈ちゃんのフェラだあつ！」

「あは、はひいい……んぷん……んちゅ、ちゅぷんつ！」

大きなバストを無数の掌でもみくちやに弄ばれながら、求められるまま臭い勃起を喉奥まで啜え込まさせられる麻利奈。

担任教師のペニスで子宮口を突かれる少女は、もう自我なんて、失っていた。光を失った瞳は虚ろに蕩け、牡たちの欲求に従う事しか、しない。

既に男を教えられているからだろう。性熱で汗を流す肌は、少女らしからぬ濃い女のフ

エロモンを芳香させている。

勃起で深く突かれる少女腰は柔らかくクネリ、男の力強さを受けとめるだけでなく、女体自身も勃起との肉擦り快感を貪欲に得ていた。

「んちゅ、ぷちゅぺろ……んくうううつ——っせんせつ、中あつ、ズンズンんつ——っ胸もうつ、あひゃんんつ——っいいいいいいいいいっ！」

揺れるぼつちやり系の肢体は肉感的にクネられて、大きな双乳が男の掌の中で、タップンと跳ねている。

天に向かって限界まで開脚された女尻の谷間では、蜜を纏った後孔までもが、ヒクつく様を男たちに視姦され続ける。

女生徒陵辱の快感に震えながら、男性教師の抽送が、射精に向かって加速した。

「麻利奈くんっ、タップリ出すよおっ！」

——っづちゅっちゅっづぶづぶぢゅぷづぷつ、ぢゅりゅぬぷっぢゅぷぢゅぷづゅぷっ！  
「っひゃあああああああつ——っまりなの、なかああつ——っあっひゃあああああああ  
あああつ——っきゅんきゅんつてへっ——いっくうつ、いっちやふうううううううつ！」

受け持ち女生徒の絶頂官能を聞きながら、牡教師はとどめの一突きを刺しつつ、絶頂の中出しをする。

「女生徒にいつ、中出しだああああつ！」





「んぷっ……そおらよおおっ、ダマあつ——アタヒっ、あんあんぷっ——ペロちゅ、アタヒ、ごふかん、ぐせへっ——ついひっ、いいいいいい——もつとごふかんっ、あっひゃあんっ——つごうかんしてへええええええっ！」

背後から勃起責めする少年に罵られても、もう真琴は従順に肯定する以外、考える事すらできなかつた。

全身へのレイプで締めつけを増す膣道に向かつて、強姦少年は抽送の速度を、射精に向かつてのみ、上げてゆく。

——つづちゅぷちゅっ、にゅづちゆるうつづぷぢゅるぷっ、づぷづぷづぢゅっ！  
鍛えた男子による、最高速度での勃起責め。

浅く抜かれて肉カリ部分で膣孔をえぐられると、発狂しそうなほどの、子宮の飢餓感。次の瞬間に子宮壁を強く叩かれると、息が止まって意識が飛ばされてしまいそうなほどの、女の充足感。

「あひっはひいいいっ——つぬいちやラメおくいいいいいいっ——つくるっ、くるっちやふよううっ——つあつあつあつあつあつあつあつあつ——つ勃起ひっ、ポッキすてきいいいっ——つダマのっ、ソガべくんのっ——つみんなのおちんちんっ——つアタヒにちようらひいっ——っ！」

男子たちのペニスから漏れる先走りの液で、乳房や膝裏や耳まで穢されて、細い糸を引

いている。

レイプの現場に充満する牡汁と蜜の混ざった匂い。それよりももっと、自身の女体で芳香する臭い性臭に鼻腔から脳までが、淫墮漬けにされてゆく。

もう自分でも、どれほど浅ましい言葉を吐いているのかすら、真琴には解らなかつた。キツく締めつける膣壁を、太さと熱がグンと増した勃起で突き上げられると、もう子宮と脳は男性のくれる充足感しか、いらぬ。

「あつあつあつあつあつあつ——つダメつ、ダメあああつ——つアタヒをつ、オカひてつ——つごふかんレイプつ、だいきすいいいっ——このままつ、くるつちやふううううううううつ！」

無意識にも、自ら女の底辺にまで墮ちる宣言。全てを失ってしまったと、真琴の心は苦しみから解放されていた。

と言うより、強姦されても悦楽を貪るといふ姦落しか、もう真琴にはなかつた。

耳の奥が、心臓の鼓動だけで支配される。汗散らす肉体は脱力しながら快感に震え、媚びるようにクネられて魅せ付け、男性の自尊心と勃起に対して服従奉仕の肢体。

蕩けきつた瞳で肉棒を哀願する少女の膣壁が、勃起への快感奉仕で、蜜を溢れさせながら更にキユムつと絞られた。

「お望み通り狂わしてやらあつ、強姦大好きな肉女になつ！ そうらつ、イけよおつ！」

強姦男子に罵られながら、飢える子宮に一際強く、勃起突きが与えられた。

——つづちゅつつ!!

「つ——つつかくううつ——つあつあつ——つあはあああああああああああああ  
あああああああああつ!!」

牡の強い肉詰めをされた瞬間、真琴の意識と肉体が、知らない絶頂まで飛ばされる。

子宮は牡の肉充で感激して熱に震えて、新しい蜜をピユつつとこぼす。開かれた目の奥が激しく輝いて、背筋と脳裏が爆ぜる感覚。

後孔と一緒に収縮する膈壁が、更に勃起を抱き締めて愛撫。粘膜がペニスの根元から先端に向かって波打つと、濡れたクリトリスも震えながら包皮に隠れた。

「犯されたらイクって言えよつ。そらつ、中出しだあつ!!」

言われたと同時に、胎内の熱肉がビクんと跳ねて、強い勢いの射精を受ける。

——つづびゅ——つづ、びゅうううう

ううううううううううううつ、びゅくつ、ドぶビゆるッつ、ビゆるルる  
つつ!!

堅い肉棒の先端を子宮壁に押しつけられて、鈴口から水鉄砲の如き出力で、汚液を吐き出される。

穢れを知らない粘膜で受けとめさせられながら、溢れるほど胎内を満たすスペルマの粘

度と熱さで、真琴の絶頂は更なる高みへと押し上げられてしまう。

「なかつ、なか、あついいいっ——つあつはあんっ——またイ……いつちやふようっ……あは、ああんっ……つアタシっ、なかだしされてへっ……また、イいつちやうううううううううっ……っ!!」

ピクンっピクンっ、と肢体を痙攣させながら、更に膝や乳房や耳を楽しんでいた男子たちにも、射精をされる。

——っビュくりユぢゅびゆるルっ、どぶどびユびゆるリユりゆりゆるッ、ビゅうウううウウウうっ!

空手少女の黒い髪に、両耳の奥に、細い鼻筋に、白い頬に、双つの巨乳に、皮膚薄い内股や柔らかい膝裏にまで、男子たちの白濁が大量に降りかかり、ネットリと臭い糸を引いて垂れる。

そして強姦された膣孔からは、愛液と精液が混ざった混合の淫液が、勃起と肉密着する膣壁の間から、ゴプり……と溢れた。

「アタヒい……みんなに、おかされて……いつちやたの……えへ……」

暴力に屈し、強姦されて子宮内射精されて、あげく性絶頂。淫惨な陵辱に晒されて墮ちきった空手少女は、まるで幼女の如く、無垢な笑顔に蕩けていた。

射精を終えたペニスが抜かれると、更なる淫劇を言い渡される。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**